

栗田障子詩考

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/11896>

出版情報：語文研究. 73, pp.11-20, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



粟田障子詩考

木 戸 裕 子

殿上より、梅の花散りたる枝を、これはいかゞといひたるに、たゞはやく落ちにけりといらへたれば、其詩を誦して、殿上人黒戸にいとほく居たるを、上のおまへに聞召て、よろしき歌などよみて出だしたらんよりは、かゝる事はまさりたりかし。よくいらへたると仰せられき。

〔三卷本枕草子〕一〇一段^律

殿上人からの試みに対して、歌を詠むかわりに『和漢朗詠集』にも採られた大江維時の詩序の一部を答えとして、殿上人や中宮定子から称讃されたという、よく知られた逸話である。平安朝も半ばを過ぎると漢詩文は既に後宮の女性たちにとっても親しいものとなっていた。『枕草子』中には漢詩文にまつわる逸話が多いが、『枕草子』を挙げるまでもなく、当時の和歌や和文には多かれ少なかれ漢詩文の受容、影響が見受けられる。

漢詩文が和歌和文に受け入れられるにつれて、逆に日本人が作る漢詩文には和歌和文的なるものを取り込んで行くことが可能となったのではないか。本稿では十世紀末に作られた大江匡衡の粟田障子

十五連作に見える和文世界との交流をいささか考察してみたい。^{注2}

粟田障子詩は、藤原道兼の粟田山荘の調度として作られた障子絵に賦された連作の詩である。この障子には漢詩と共に和歌も詠じられており、同じ絵を詠んだ惠慶の障子歌の存在が熊本守雄氏によって確認されている。^{注3}また、この障子は、『栄花物語』の記述によれば、将来の后がねとなるべき女兒の誕生を切望した道兼が、生まれてくる女兒の養育のために準備した品々の一つであった。^{注4}したがって、もしも漢詩にある程度和歌和文的な要素を持たせようとするならば、それを試みやすかったのではないかと推測される。以下、具体的な作品に沿ってみていく。

なお、粟田障子詩は匡衡の詩文集『江吏部集』では、題注に粟田障子作と記されているが、本稿においては粟田障子詩と呼ぶことにする。

一

過海浦

海浦を過^よぎる

經過海浦水漫々 海浦を經過すれば水漫々

幽趣風烟極目看 幽趣風烟は目を極めて看る

聘使家留臨古岸 聘使は家に留まりて古き岸に臨み

漁夫舟泛任輕瀾 漁夫は舟に泛びて輕き瀾に任す

郷心遠樹孤雲隔 郷心遠樹孤雲は隔て

客路邊山落日殘 客路邊山落日は殘る

自感去來潮有信 自ら感ず去來たる潮に信有りと

不知早晚歌歸鞍 知らず早晚歸鞍を歌むるを

右の粟田障子詩其六は熊本守雄氏によって須磨の浦の絵に賦したものであることが指摘されている。粟田障子は「国々の名所書かせ給」(『栄花物語』)うたものであり、熊本氏の挙げる惠慶の障子和歌の配列や内容から考えても、右の詩も須磨を描いたものと比定でき

る。須磨は和歌においては、古今集以来歌枕として著名な地であった。歌枕としての須磨はどのように詠じられてきたのであろうか。

田むらの御ときに事にあたりてつのくにのすまといふ所にこ

もり侍りけるに侍りける人につかはしける

わくらばにとふ人あらばすまのうらに

もしはたれつゝわぶとこたへよ

(『古今集』雑下 九六一 在原行平)^{注5}

何らかの事情で都を退去しなければならなかった行平が詠んだ和歌として有名な作である。そのため、須磨には流謫、望郷のイメージがある。それはやがて『源氏物語』の「須磨」「明石」両巻に書

かれる所でもあった。匡衡の作は後半の二聯に故郷を離れた旅人の望郷の念、いつ帰京できるかおぼつかない心細さが描かれている。匡衡よりも一代前の歌人大中臣能宣の歌にも匡衡の作によく似た趣向のものが見える。

つくしへくだりはべるに、すまのうらといふところにて

すまのうらはけふすぎゆくとしかたへ

かへるなみにやことをつけまし

(『能宣集』三三二)

能宣の歌は筑紫の国へ下向する途上に詠じたもので、帰ることのできない旅ではない。しかし、寄せては返す波に託した望郷の思いは、先に挙げた行平の歌や、流謫の光源氏の心情にも通ずるところがある。

また、須磨といえば「塩焼く煙」でも有名である。

題しらず

すまのあまのしほやく煙かせをいたみ

思はぬ方にたなびきにけり

(『古今集』恋四 七〇八 よみ人しらず)

匡衡詩の首聯にも「幽趣風烟」の語がある。中国語で「煙(烟)」というときは、日本語と違い水分を含んだもや即ち「霞、霧」を意味する。従って、漢詩作品である粟田障子詩の場合も海辺のもやとすべきなのかもしれない。だが、それが須磨の絵に賦されたときに、

鑑賞する側にしてみれば当然、「須磨↓塩焼く煙」という連想が働くはずである。和歌でも霞、霧と共に煙を詠んだものが幾つかある。

二

(村上の先帝の御屏風に、国の所の名をかかせたまへる)

もしほやくけぶりになれしすまのあまは
秋たつきりもわかずやありけむ

〔中務集〕二七

(あるところの月なみの屏風歌)

正月、すまのうらもしほやく所
すまのうらのもしほのけぶりはるなれば
うらにかすみのなほやたつらむ

〔能宣集〕八二

右の二首はいずれも匡衡より一世代前の屏風歌である。屏風の絵は現存していないが、海辺にもやのたなびく様子が描かれていたのである。粟田障子の絵も同じような風景であったものと思われる。加えて、匡衡詩の第四句目の「漁夫」の語も『古今集』や中務の歌に見られる「すまのあま」と同じものであろうと思われる。

つまり、本詩は「須磨」の名こそ明記されていないが、その内容は、歌枕としての「須磨」が喚起するイメージを利用したものである。

嵯峨野秋望

何處秋情不可涯
嵯峨曠野近京華
影疎堤畔蕭條柳
香亂藜間爛熳花
遙漢風高聞鴈檣
遠村雲斷見人家
興餘軒騎忘歸路
不奈山西日已斜

嵯峨野の秋望
何れの処にか秋の情漙るべからざる
嵯峨の曠野は京華に近し
影は疎し堤の畔に蕭條たる柳
香は乱る藜の間に爛熳たる花
遥漢に風高く雁檣を聞き
遠村の雲断たれ人家を見る
興余りて軒騎帰路を忘る
奈ともせず山の西に日已に斜めなり

粟田障子詩其九である右の詩について、冒頭部と末尾に白居易の詩語の利用が見られることは別稿に述べた。^注しかし首聯の二句の背後にあるのはそれだけではない。

みかど「年のうち、木草のさかり、秋のほどにいつか」ととはせ給。藏人少將なかよりそうす、「野のさかりは八月なかの十日、山のさかりは九月かみの十日のほどになん。」野山のなかにはいづれかおもしろき。」なかよりそうす、「ちかきほどには、さが野・かすが野、―後略―」

〔宇津保物語〕「ふきあげの下」^注

帝の下問に対して、京の都近くで興味あるところの第一に嵯峨野

が挙げられている。もちろん、この『宇津保物語』の文章が匡衡の詩句の直接の出典であるという訳ではなからう。しかし、平安人に「秋の野は嵯峨野」という共通の認識があり、それを言語化したときに、よく似た表現となることは興味深い。匡衡の詩句は、白居易の句法を利用したものであると同時に、一方では当時の一般的な通念を素直に表したものと見えよう。匡衡の粟田障子詩は「名ある所々をかくせ給」うたはずの絵に賦されたものでありながら、地名を明記したものは現存十四首のうち四首にとどまる。その一つが嵯峨野であることは、いかにこの地の名が平安人にとって親しいものであったかを示しているのではないか。

嵯峨野がいかに有名な歌枕であったかは今更言うまでもないが、例えば清少納言も次のように記している。

野は嵯峨野さらなり。印南野。交野。駒野。飛火野。しめし野。
春日野。——後略——

〔枕草子〕一六二段

嵯峨野の遊びといえは、何といつても秋の花見と前栽掘りである。嵯峨野を詠じた和歌もこの二つを描いたものが多い。

さをしかのつまごひどきになりにけり
さがのの花もしたもみぢして

〔伊勢集〕四一六

そののみやのおとど、さが野にいでて侍りしに

秋の野の秋のにしきを故郷に鹿のねながらうつしてしかな

〔元輔集〕二〇〇

藏人所のをのこども、御前のせざいほりにさがのにまかりたりしに

としごとのおほみやびとのくるのべは

さがのことやはなもみるらん

〔能宣集〕九七

人人のさが野にゆくひとまりていひやり給うける

いざなはでいくやなになり女郎花わきて一もとのべのあたりを

〔公任集〕八六

匡衡の詩にも、咲き乱れる秋の野の花々、それらを見るために乗り物や馬を連ねて訪れた人々の姿が描写されている。大勢ででかける秋野の花見は中国詩には見られない素材である。中国詩では秋の花を愛で喜ぶということは殆どなく、ひたすら衰えゆくものに對する悲哀感が強調される。^注匡衡詩の冒頭「何處」と末尾「日已斜」が白居易の「和春深」の表現に倣ったものであっても、白居易の詩が「春深好」であるのに対して、匡衡の詩が「秋情不可涯」であるのは、まさにこの両者の違いを表すものといえよう。

三

題玉井山居

玉井山居に題す

称得山莊望地形 山莊を称得て地形を望む

始知玉井在中庭 始めて知りぬ玉井の中庭に在るを

遙分岷嶺風流美 遙かに分く岷嶺風流の美

暗寫華林水氣馨 暗に写す華林水氣の馨

數點苔侵藏石磴 數點の苔侵して石磴を蔵し

孤輪月落見銀瓶 孤輪の月落ちて銀瓶を見す

佳人凝睇卷簾坐 佳人睇を凝らして簾を巻きて坐す

雲樹重々山色青 雲樹重々として山色青し

本詩は粟田障子詩其十四、玉井を描いた絵に賦されたものである。だが、玉井には歌枕としての明確なイメージがない。ここでは「山居」即ち山里について考察する。

本詩においては尾聯第七句目が注目される。それまでの山莊の庭の描写から、一転して室内で物思いにふける美女の姿を描く。山里に住む美女は大和絵で好まれた素材であった。屏風絵にそのような題のものがあつたことは屏風歌等の詞書によって知られる。

同じ年(天慶二年)さいさうの中將屏風の歌

山里に住む女、子曰する

足曳の山べの松をかつみれば心をのべに思ひやるかな

朝なけに見つつすめどもけふなれば山べのみこそ思ひやられる

〔貫之集〕第四 四二六 四二七

ゑに、やまざとなるをんなのつらづゑをつきて人まつかたか
きて侍りしところに

すみしれる月とみつるにこととはん人まつよひの秋の山かぜ

〔兼澄集〕一三〇四

屏風のゑに、はなさきたる山ざとのかすかなるに、女ただひとりあり

みる人もなきやまざとの花のいろは
なかなかかせぞをしむべらなる

〔藤原道信朝臣集〕五五

ゑのところに、やまざとにながめたるをんなあり、ほととき
すなくに

宮こ人ねでまつらめやはとときす
いまぞやまべをなきてすぐなる

〔道綱母集〕三二八

匡衡の場合もおそらく、障子には簾を巻き上げて座る女性が描かれていたのであろうから、それを漢詩に登場させるのは当然と言え
ば言えるかもしれない。だが、粟田障子の同じ絵に賦された藤原為
時の詩には女性の姿は描かれない。

玉井の佳名世に称せらる 松の楹半ば接す碧巖の稜

山雲舎を繞り幔を褰ぐべし 潤月窓に臨み灯に代はらんとす

梅は寒花を発き朝に雪を見る 水は幽響を収め夜水を知る

池辺何物か相尋ね到る 雁は来賓と作し鶴は朋と作す

〔本朝麗藻〕訓読は私案による

この為時の描く風景は匡衡のものとはほぼ同じである。しかしその修辭は中国の山居詩の類型を踏襲しており、女性の姿どころかその存在を示唆するものさえ見られない。あたかも唐絵山水画に賦した作のようである。これは為時が意識的に女性を排除して、あくまでも中国風の、隱者や神仙の住む山居を描こうとしたためであろう。

一方匡衡は山里の美女といういかにも大和絵的な素材を描く。しかしその表現には中国の閨怨詩的なものをも借りている。第五句第六句における井戸と銀瓶の組み合わせは、白居易の「新樂府」其四十一「井底引銀瓶」にもとづく。

井底銀瓶を引く 銀瓶上がらんと欲して糸繩絶つ
石上玉簪を磨く 玉簪らんと欲して中央より折る

瓶沈み簪折る知らず奈何せん 妾が今朝君と別るるに似たり

(訓読は『中国詩人選集12 白居易上』による)
この樂府は「淫奔を止むる也」という題注がついており、礼によらない自由結婚の悲劇を主題とするが、匡衡詩では男女の別れを暗示するために用いられている。

匡衡詩の佳人は「凝睇」は『伊呂波字類抄』では「ナガシメミル」の読みがついており、閨怨の情を含んだまなざしである。中国でも閨怨詩において、もの思う美女はさまざまに描かれてはいる。しかしながら、山居と結び付けたものは殆ど見られない。漢籍においては山中は神仙の住むところであり、従って山里の美女とは仙女にはかならない。例えば日本でも珍重された『遊仙窟』における十娘と五娘、『蒙求』「劉阮天台」に見える天台山中に住む二人の仙女など

がそうである。

かたや、日本では『源氏物語』の浮舟を挙げるまでもなく、山里に住む女性は生身の人間であり、しかも何等かの事情で隠れ住む場合が多かった。そしてそのような状況が好まれたことは、時代は下るが『更級日記』のよく知られた一節からもうかがえる。

いみじくやむごとなく、かたちありさま物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花・紅葉・月・雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを、時く／＼まち見などこそせめ、とばかり思ひつゞけ、あらまし事にもおぼえけり。

匡衡はこのような日本の物語に見える「あはれ」を表現しようとしたのではないか。

四

歳暮旅行

歳暮の旅行

水宿山行羈旅身

水宿山行羈旅する身

窮陰慘儉白經旬

窮陰慘儉として自ら旬を経たり

雪深雖指前程遠

雪深く前程遠くを指すと雖も

唯喜中途欲遇春

唯だ喜ぶ中途に春に遇はんとするを

右は粟田障子詩其十五、連作中の最後を飾る詩である。本詩につ

いては熊本氏の論によっても、『惠慶集』中に本詩と同じ画面を詠んだと比定し得る歌が現存しないため、地名の特定はできない。だが、雪の中を行く旅人という題材から、常陸国などいわゆる東国、あるいはより遠方の陸奥国などへ赴任する国司の姿を描いたものではないかと思われる。

当時、ただでさえ旅は大変な困難を伴うものであった。まして、寒さや雪に悩まされる冬の旅人の苦勞と不安は想像するに余りある。しかしその侘しさが、かえてあはれを催すものとなり、和歌に詠まれもした。

〔康保五年、女五男八親王の御屏風の歌〕

雪ふる日、あづまのかたにおひつらねたり

旅の空くもるくるしなあづまぢのゆききのかたもみえぬ白雪

〔源順集〕二二三〕

物おもひける人のふゆものへいきけるにひのみえければ

ふゆがれのべとわがみをおもひせば

もえむはるをもたまましものを

〔伊勢集〕二九一〕

おほゆきにたびゆく人、十二月つごもりに

ゆきふかくゆくあづまぢもとひくれど

みちにてはるにあひぬべきかな

これは中つかさが集にもいれり

〔伊勢集〕四五九〕

〔村上の先帝の御屏風のゑに〕

ゆきふるにもものへゆくひと

ゆきふかくゆくあづまぢもとほけれど

みちにてはるにあひぬべきかな

〔中務集〕四四〕

これらのうち、最後の二首は細かな異同はあるものの、同じ歌である。伊勢の歌の第三句「とひくれど」では意味が通らないので、おそらく中務の「とほけれど」が正しい形で、伊勢のほうは誤写を想定すべきであろう。この歌の本来の作者が伊勢と中務のどちらであるかは不明だが、二人は母子であるので伝播の過程で混乱が生じたものと思われる。

ともあれ、注目すべきは、この二首と匡衡の詩の転句、結句との類似である。匡衡詩の転句「雪深く前程遠くを指すと雖も」は上の句「ゆきふかくゆくあづまぢはとほけれど」の、結句「唯だ喜ぶ中途に春に遇はんとするを」は下の句「みちにてはるにあひぬべきかな」の漢詩訳ともいふべき形になっている。しかも、伊勢のほうは詞書までが「おほゆきにたびゆく人、十二月つごもりに」であり匡衡の詩の題「歳暮の旅行」にはば一致する。

これほど酷似していると、匡衡があるいは伊勢の家集を見て、それを漢詩の形に翻案したのではないかと思えてくる。匡衡と伊勢や中務との直接の関係は確認できない。だが、後述するごとく匡衡は歌人としても家集を残しており、それにより歌人の大中原能宣との交際があったことがわかる。したがって他の歌人の家集を見る機会があったとしても不思議はない。ただし、和歌から漢詩への、いわ

ば本歌取りにも似た翻案は『新撰万葉集』のほかに殆ど例を見ないため、果たして本詩が本当に伊勢(中務)の歌の影響下に賦されたものかは、なお慎重に判断せねばなるまい。

だが、この匡衡の詩が東国や陸奥へ旅する人を描いたものとするならば、伊勢(中務)の和歌とだけではなく、当時の一般的な認識とも関係があるのである。

はるかなるもの 半臂の縮ひねる。みちの国へいく人、逢坂こゆるほど。生れたるちごの、おとなになるほど。

『枕草子』一〇三段

陸奥国への旅が「はるかなるもの」であるというのは、当たり前といえればそれまでだが、「はるかなるもの」と言ったときに、即座に陸奥国への旅を連想するのは清少納言だけではあるまい。その連想が、逆に、雪の中の旅人を詩に賦す際の「前程遠くを指す」という表現をもたらしたのではなからうか。

本「歳暮旅行」詩は、一見和歌とのつながりは薄いようだが、こうして見てくると、題材や発想の面で実は和歌や和文と共通するものがあることがわかる。

五

以上、粟田障子詩のうち比較的和歌和文的な傾向の強い四首を取り上げた。残り十首にも多かれ少なかれその傾向は見られる。もちろん、もともと大和絵の名所絵に賦されたものだから、題材が

和歌和文的になるものは当然と言えるかもしれない。が、先に三で匡衡の作と藤原為時の作を比較したごとく、画面には描いてあっても、詩中に言及しないということもできるのである。実際匡衡の作中にも、和歌的な特徴が殆ど見られず、むしろ、敢えて漢籍からの典故を中心に構成したのではないかと思われるものもある。その理由については、粟田障子詩全体の構成とも関連するので、また稿を改めて考察したい。

ただし、和歌和文的な傾向とは言っても、それは歌枕から喚起されるイメージや、題材にとどまっておき、表現技巧的なものには及んでいない。例えば、名所を詠んだ和歌の場合、多くは地名を用いた掛詞が使われる。

ながらのはしをみて

ありけりとはしはみれどもかひぞなき

舟ながらにてわたると思へば

『和泉式部集』六八六四

粟田障子詩でも其七に描かれている、津の国の長柄橋を詠じたものである。長柄橋が和歌に詠まれるときは殆ど、右の和泉式部の歌のごとく「長柄」「ながら」の掛詞が用いられる。

また、先に二でみた嵯峨野を詠んだ和歌のうち能宣の作は地名の「嵯峨」と「習わし、習慣」を意味する「性」とが掛けてある。

だが、粟田障子詩ではそのような掛詞は使われていない。これは、漢字は表意文字であり、表音文字である平仮名を用いる和歌のように語の同音異義性を利用することが比較的困難であることによるだ

ろう。また、漢詩の方が和歌に比べて一首に盛り込める情報量が多いため、言葉の多義性を利用する必要も少ない。つまり、本来中国語である漢詩と日本語である和歌のそれぞれの言語のもつ性格の違いと言えよう。^{注13}

最後に、匡衡の和歌との関わりについて述べる。

匡衡の公的な活動は儒者の家柄である大江家の棟梁としてのものであった。だが、それ以外に彼は歌人としての事跡をも残す和漢兼作の文人なのである。私家集に『匡衡朝臣集』があり、後代の評価ではあるが、『後六々集』に歌がとられ中古三十六歌仙の一人に選ばれている。また、『後拾遺集』以下の勅撰集に十二首が入集している。

機知に富む歌を読み称賛されたことは『今昔物語集』巻二十四の五十二の逸話でも窺える。^{注14}

大江匡衡和琴讀和歌語、第五十二

今ハ昔、式部大夫大江匡衡ト云人有キ、學生ニテ有ケル時、閑院ノオハ有レドモ、長ク高クテ指肩ニテ見苦シカリケルヲ云咲ケルニ、匡衡ヲ呼テ女房共和琴ヲ差出テ、萬ノ事知り給ヘルナレバ、此レヲ彈キ給ラム、此レ彈給ヘ聞カムト云ケレバ、匡衡其ノ答ヲバ不云シテ、此ナム讀懸ケル

アフサカノ關ノアナタモマダダミネバ

アツマノコトモシラレザリケリ

ト女房達此レヲ□其ノ返シヲ否不爲マジカルケレバ否不咲テ極キ静テ、獨立チニ皆立テ去ニケリ、亦此ノ匡衡望申ケル時ニ、否不成テ嘆ケル比、殿上人數人大井河ニ行テ船ニ乗テ差シ上リ

差シ下リ行テ遊ツ、人々歌讀ケルニ此匡衡モ人々ニ被唱テ行タリケレバ、匡衡此ナム讀ケル

河舟ニノリテ心ノユクトキハシヅメル身トモオモハザリケリ^{注15}
人々此ヲ讀メ感ジケル、中略此匡衡ハ文章ノ道極タリケルニ、亦和歌ヲナム此微妙ク讀ケルトナム語り傳ヘタルトヤ

ここに採られている歌はそれぞれ、『匡衡朝臣集』にあり、前者は「学生にて有ける時」というのであるから、粟田障子詩作成以前ということになる。「河舟に」の歌は『江吏部集』にも和歌序と共に収められており、それによれば寛弘三年、匡衡晩年の作である。右の逸話は説話であるから、どの程度まで真の詠作事情を伝えているかはわからない。しかし、後代のこととはいえ、勅撰集に入集するということは、歌人としての能力を同時代人からも認められていたのである。

その匡衡の和歌は右に挙げた『今昔物語集』所載のものを始め、穏和な作風で、歌集のみを見る限り、文人であるとはわからないほどである。だが、そのような和歌を詠めたからこそ、漢詩文の中に和歌和文的なものを取り込むことが可能だったのではないか。温かな作風こそ、公任が『和漢朗詠集』を編み、紫式部が『源氏物語』を書いた、いわば和漢兼作の時代とも言えるこの一条朝の文学の特色であった。大和絵に漢詩と和歌の両方を詠むという粟田障子詩は、まさにこの時代の中から生まれたのであり、匡衡の漢詩はその趣旨に沿うべく作られたのである。

注1 本文は岩波書店新古典文学大系による。

注2 「粟田障子十五連作」全体については『文献探究』二十七号、二九号にその試注を掲載した。(木戸裕子「大江匡衡粟田障子十五連作」)本稿の記述はそれと密接に関わるものであり、一部内容に重複する所がある。

ただし本稿ではあくまで和歌和文と関係する問題を中心に扱う。したがって漢籍の出典やその影響については、『文献探究』のほうを参照されたい。

注3 熊本守雄「惠慶集と江吏部集」粟田山庄障子絵と和歌と漢詩——『惠慶集 校本と研究』

注4 『采花物語』巻三「さまざまの喜び」

注5 本文は新編国歌大観による。以下の歌も同じ。

注6 注2参照

注7 本文は『宇津保物語 本文と索引』による。

注8 其一「春日野行」、其二「妹妹山下卜居」、其九「嵯峨野秋望」、其十四「題玉井山居」

注9 例えば『古詩類苑』『唐詩類苑』秋部の詩において「花」が詠まれるものはほとんどない。詠まれる場合も、悲哀感を強調するために、衰えた残花を描く程度である。

風和老葉蕭條綠 水蓼殘花寂寞紅

蘆花迷夕棹 梧葉散秋砧 謾作歸田賦 嗟陀歲欲陰
(白居易「縣西郊秋寄贈馬造」)
(許渾「秋晚登城」)

また、行楽部、遊覧部の詩にも秋の花見を主題としたものは見当たらない。

注10 注2参照

注11 本文は岩波書店新古典文学大系による。

注12 『匡衡朝臣集』

能宣が四十九日の中に、すけちかが冠たまはりたりし、願文

つくらせたりし奥に、かきつけたたりし

六一 色色におもひこそやれすみ染の
袂もあけになれる涙を

かへし、すけちか
六二 すみ染にあけの衣をかさねきて
なみだの色の二重なるかな

注13 漢詩文において掛詞の表現がないわけではない。このことについては、

工藤重矩氏が「平安朝漢詩文における縁語掛詞の表現」(『和漢比較文学叢書第三卷中古文学と漢文学』)の中で詳細に論じておられる。しかし、その多くは漢字の持つ多義性を利用して固有名詞に普通名詞の意味を含ませるもので、日本語の同音異義性を利用して、固有名詞である地名に助詞や動詞など他の品詞さえも掛ける名所和歌の掛詞の例とはやや性質が異なる。

また、大江匡衡の言語遊戯的な表現については拙稿『江吏部集』に見られる言語遊戯的表現について(『語文研究』第六四号)に述べた。匡衡の作品における言語遊戯的な表現も工藤氏の論に述べられるところの平安朝漢詩文全般に見える縁語掛詞的な表現に一致する。

注14 本文は岩波書店日本古典文学大系による。
注15 『匡衡朝臣集』『江吏部集』では「おもほえぬかな」

付記

本稿を成すにあたっては、熊本大学の金原理先生の御学恩をこうむりました。ここに深くお礼申し上げます。